



①銅版画の工程。版全体にインクを塗り、溝の中にインクを入れ込む。



②不要な表面のインクを布などで丁寧に拭き取り、溝の中だけにインクを残す。



③専用の紙を版の上に重ね、プレス機にかけて強い圧力で紙にインクを転写する。

— 腐蝕とともに歩んだ60余年 —

「すべて腐らないものはない」
中林さんの制作を貫くのが、「すべて腐らないものはない」という言葉である。高校時代に触れた詩人・金子光晴さんの言葉が、大学で銅板を実際に腐蝕させた体験と結びついた。銅板も植物も人間も、時間の中で変化し、やがて朽ちていく。中林

「見えないところで、自分のイメージが形成されていく」。
中林さんは、そこに銅版画の面白さがあるという。腐蝕の進み方は気温や季節にも左右される。夏は速く、冬は遅い。反応で生じた気泡が版面に付くと、その部分だけ腐蝕が進まないため、鳥の羽根で丁寧に払う。狙った深さへ近づける技術は欠かせないが、自然条件を完全に支配することはできない。作家の意図と偶然が重なるところに、銅版画ならではの表情が生まれるのである。

「見えないところで、自分のイメージが形成されていく」。
中林さんは、そこに銅版画の面白さがあるという。腐蝕の進み方は気温や季節にも左右される。夏は速く、冬は遅い。反応で生じた気泡が版面に付くと、その部分だけ腐蝕が進まないため、鳥の羽根で丁寧に払う。狙った深さへ近づける技術は欠かせないが、自然条件を完全に支配することはできない。作家の意図と偶然が重なるところに、銅版画ならではの表情が生まれるのである。

「見えないところで、自分のイメージが形成されていく」。
中林さんは、そこに銅版画の面白さがあるという。腐蝕の進み方は気温や季節にも左右される。夏は速く、冬は遅い。反応で生じた気泡が版面に付くと、その部分だけ腐蝕が進まないため、鳥の羽根で丁寧に払う。狙った深さへ近づける技術は欠かせないが、自然条件を完全に支配することはできない。作家の意図と偶然が重なるところに、銅版画ならではの表情が生まれるのである。

「見えないところで、自分のイメージが形成されていく」。
中林さんは、そこに銅版画の面白さがあるという。腐蝕の進み方は気温や季節にも左右される。夏は速く、冬は遅い。反応で生じた気泡が版面に付くと、その部分だけ腐蝕が進まないため、鳥の羽根で丁寧に払う。狙った深さへ近づける技術は欠かせないが、自然条件を完全に支配することはできない。作家の意図と偶然が重なるところに、銅版画ならではの表情が生まれるのである。

転位 '96 ー地ー I
(エッチング、アクアチント、(黒白 2 版刷) 44.2 × 34.5cm
1996 年)

銅版画では、銅板の表面を防蝕膜で覆い、針などで膜を取り除いた部分を薬品で腐蝕させる。生じた微細な凹みにインクを詰め、表面を拭き取り、湿らせた紙とともにプレス機に通すと、凹部のインクが紙へ移り、像が現れる。インクをどこまで拭き取るかによっても、黒の深さや画面の空気は変わる。銅板、インク、紙、圧力のすべてがそろって、初めて一枚の作品になるのである。腐蝕中の変化は目で確かめることが難しい。一定時間後に版を引き上げ、刷って初めて線の深さや黒の強さが分かる。

銅×芸術
COPPER ART
カパーワールド
Copper World

銅版画の世界



中林 忠良

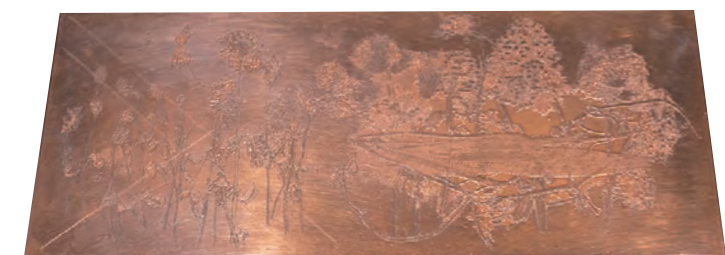
NAKABAYASHI, Tadayoshi.

東京藝術大学名誉教授

1937 年東京都生まれの銅版画家。東京藝術大学油画科在学中に銅版画と出会い、以来 60 年以上にわたり、エッチングやアクアチントによるモノクローム表現を追究してきた。「すべて腐らないものはない」を思想的背景に、腐蝕と時間の痕跡を刻む作品で知られる。同大学教授として後進育成にも尽力し、2003 年紫綬褒章、2014 年瑞宝中綬章を受章。日本藝術院会員。



Position '89・腐食 III
(エッチング、アクアチント、ドライポイント 15.7cm× 38.8cm 1989 年)



日本銅センター賞表彰式で展示された上作品の銅原版



位置 '19 ー光ー II (エッチング、アクアチント 36.5 × 79cm 2019 年)